インタビュー

## 報道カメラマン横田　徹氏に聞く

# ウクライナ前線ドローン戦術のリアル（前編）


聞き手　**部谷　直亮**
現代戦研究会代表、防衛技術協会客員研究員

構　成　**菊池　大毅／長沢　健太**
現代戦研究会、防衛技術協会客員研究員

監　修　**平田　知義**
現代戦研究会技術顧問、防衛技術協会客員研究員


ウクライナの最前線に幾度も取材を敢行し、その記録をまとめた著書「戦場で笑う」（朝日新聞出版）、写真集「FPV －ウクライナ狂騒曲」（笠倉出版社）という現代戦のバイブルとも言うべき２冊を出版し、戦塵さめやらぬ中東の取材から帰国したばかりの報道カメラマン横田徹さんにインタビューを行った。

本稿では 30 年近く、各地の最前線を疾駆してきた横田さんがウクライナの戦場や現代戦の様相について縦横に語った内容を前後編でお送りする。

前編の今回は「ウクライナ前線ドローン戦術のリアル」についてー

## 高速運転で自爆ドローンをかわす？

**部谷**：まずウクライナの前線におけるドローン対処、探知についてお聞きしたいのですが、ウクライナ軍ではどのように発展していったのでしょうか？（**図１**）

**横田**：ドローン探知は、2024年３月に取材した時点で小型のスペクトラムアナライザ（以降、アナライザ）が部隊に配備されて実験が行われていました（**図２**）。当時はウクライナ正規軍ではなく領土防衛隊レベルで独自に様々な形状のアンテナを取り付けるなどして飛来するドローンの電波を検知するなど個人装備として小型のアナライザを持っていましたね。

ただ、車両での移動中の対処は難しくほとんど手の打ちようがないとのことで、ジャミング

**図１　FPV 自爆ドローンの離陸準備中の様子**
（写真：横田徹）

図２　前線近くの拠点の中で小型スペクトラムアナライザを試すウクライナ兵（写真：横田徹）

図３　部隊が時速100km 超えの速度で移動する際の車内の様子（写真：横田徹）

装置の効果も薄くなってきていたこともあり、車にネットを張って移動する、車両の速度は常に100km 近く出すなど、高速で飛行する FPV 自爆ドローン対策をしていました。

最近ではロシア側がオートバイを使用して移動していると現地の兵士から聞いています。オートバイは小回りが利くので森に入っていけるなどのメリットはありますが、不整地では思うように速度を出せないこともあって、開けた場所では FPV ドローンに追いつかれます。こうした点からバギーなどはもちろんダメ。

現場に到着してしまえば穴や地下に入るなどして隠れることもできますが、いくら速度を出していても移動中の車が FPV 自爆ドローンの攻撃を受ける可能性が高いです。移動中は祈るしかありません。

**部谷**：つまりウクライナ側ではアナライザなどで検知するなどしているが、部隊が車両で移動中はこの探知や対処が難しく移動は常に時速100km オーバーで運転しているのですね？

**横田**：はい。それも舗装された道路ではなく、未舗装の場所を常に100km 近くの速度を出して移動しています。初めてジョージア部隊を取材したときは彼らの運転テクニックに驚きつつ、自分の席の隣にスティンガー（携帯式防空ミサイルシステム）が置いてあり、起伏を通るたびにガシガシ鳴るので今にも爆発するんじゃないかと怖かったですね（**図３**）。

FPV ドローンによる攻撃は大体後ろからと聞いています。FPV 自爆ドローンが正面から飛来するのであれば乗員の視界にも入るし相対速度も大きいので回避のしようもありますが、後ろからだと忍び寄りやすいし見えにくいので対策が難しいようです。後ろに目が無いと厳しいでしょう。

## ドローンをライフルで撃ち落とす？

**部谷**：ドローン対策としてショットガンという話も見聞きしますが？

**横田**：ショットガンは「最後の武器」ですね。ドローン対策を研究するウクライナ人によればショットガンは30m くらいが限度とのこと。そこは12番の散弾のスペックを考えれば理解できます。例え自動小銃を用いたとしても小銃の弾倉には30発しか入らないですし、当たるかどうか…。現実的に厳しいと思います。わりと大きな固定翼自爆ドローン“シャヘド”であれば、マキシマム機関銃で迎撃するのが現実です（**図４**）。

**部谷**：以前、週刊誌『フライデー』の取材に答